Japanese Association of Educational Psychology

291 Japanese Journal of Educational Psychology, 1994, 42, 291−297

資 料

在日朝鮮人学校の中学生の異文化接触体験

中村俊哉[1] 慎 栄根[2] 平 直樹[3] 川本ひとみ[4] 横山恭子[5] 高田夏子[6]

CROSS-CULTURAL EXPERIENCES BY STUDENTS OF KOREAN MIDDLE SCHOOLS IN JAPAN

Shun-ya NAKAMURA, Yong-gun SHIN, Naoki TAIRA, Hitomi KAWAMOTO, Kyoko YOKOYAMA AND Natsuko TAKATA

This study attempted to inquire into the nature of cross-cultural experiences of Korean students and how it affected their views about Japanese and other cultures. The respondents were Korean students, born in Japan, attending Korean Middle Schools in Japan. It was found that a great many of the students had close friendships and relatively high interest in communicating with Japanese. Though they appeared to have neutral views about Japanese personal characteristics, they showed relatively negative views concerning Japanese attitudes toward foreign countries and/or their citizens. Moreover, favorable experiences in interacting with Japanese were mostly related to the students' overt ethnic characteristics, such as their language and traditional clothes. These experiences were found to be of relatively high importance in predicting students' interest both in communication with Japanese and Japanese culture. Finally, it was found that the factor of having close Japanese friends was related to the students' interests in cross-cultural communication. These results have implications as to the importance of the appreciation of Korean ethno-cultural factors by Japanese, and the establishment of intimate cross-cultural relationships.

Key words : Korean Middle Schools in Japan, ethnicity, cross-cultural experience, ethno-cultural factors.

問題と目的

文化接触研究，特にエスニック・グループを対象とした研究は，アメリカ合衆国で多く見られ，その発展は米国社会の変化に密接に対応している。今日では，個人を取り巻く社会文化的環境 (socio-cultural milieu) が多様になり，エスニシティという概念が一人ひとりの個人に一義的に適用しにくくなっている (Rotheram & Phinney, 1987)。

現在，エスニック・アイデンティティのあり方は，主観的なものであり変化するものとして捉えられている (Stephan, 1992)。この場合のエスニック・アイデンティティとは，自分が属する集団の文化の何らかの側面を，その文化を象徴するものと主観的に捉え，それによって自らを他の集団から区別しようとすること (De vos & Romanucci-Ross, 1975) とされる。この文脈では，たとえ出身国の言語・宗教などエスニシティを構成する要素を多く失っていたとしても，ある民族文化的要素を共有し，主観的な帰属意識により同一化していればエスニック・アイデンティティは成立するので

[1] 東京都立多摩総合精神保健センター (Tokyo Metropolitan Comprehensive Mental Health Center of Tama District)
[2] 朝鮮大学校 (Korean University)
[3] 大学入試センター (The National Center for University Entrance Examinations)
[4] 上智大学 (Sophia University)
[5] 東洋英和女学院大学 (Toyo Eiwa Women's University)
[6] 上智大学 (Sophia University)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ある。すなわち，所属集団や実態として生活習慣のあり方のみならず，出自に対する個人の心理的帰属感が本人のエスニック・アイデンティティを規定する大きな要因となると言える。両親のエスニシティが異なるケースでも，教育や本人の主観的選択の結果として本人のエスニシティが定められることになる。

ところで，時に単一民族国家と称される日本においても異なる文化背景を持つ集団は存在する。日本に在住するエスニック・マイノリティの中で最も多くを占めるのは，朝鮮・韓国系の人々（以下，本稿では「在日朝鮮人」という呼称に統一する）である。現在，在日朝鮮人は外国人登録されているだけで約70万人に上り，実数は約100万人であると推定されている(原尻, 1989)。帰化者も1991年の時点で約16万人に上り（福岡, 1993），日本人との婚姻も増えている（李, 1984；Nitta, 1988）が，現在においても彼らの多くは自らの出自に対して強い一体感を持ち，同じエスニック・アイデンティティを持つ人々とのエスニック・グループを形成している。

日本における文化接触研究は，日系移民の研究の他に，1970年代以降の日本の海外進出に伴って海外駐在員・海外子女・帰国子女といった人々の適応に関する研究が盛んになった（綾部, 1982；江淵, 1982；小林, 1981；箕浦, 1984)。在日外国人についての研究は留学生といった短期滞在者を対象にしたものが多く（例えば, 綾部・小野沢, 1970；岩男・萩原, 1988；山崎, 1993），永住するエスニック・マイノリティ・グループとホスト・カルチャーである日本文化との接触に関心を寄せたものは少ない。

本研究では，日本をホスト・カルチャーとしたエスニック・マイノリティのケースとして在日朝鮮人学校に通う中学生の日本人との接触を取り上げる。在日朝鮮人学校は，在日朝鮮人子弟に対して民族教育を成す目的で設立されている全日制の学校である。在校生徒は日本で生まれ育ち，第一言語も日本語である一方で，日常生活においては通名（日本名）ではなく本名を名乗り，女子は民族衣装を着て通学するなど，在日朝鮮人としての民族文化的要素を前面に掲げて生活している。したがって，彼らは1つのエスニック・グループを成していると規定することができる。また，中学生の時期は文化的アイデンティティを形成する上での敏感期（sensitive period）とも言われている（箕浦, 1984)。この時期までに体験する異文化，具体的にはホスト・カルチャーである日本文化との接触体験が，自らのエスニシティとは異なる他の文化に対する意識や関心の形成の1つの大きな決定要因となると推察することができる。

したがって，本研究では，

①日本人との異文化接触体験が日本に対する意識や関心の形成に影響を及ぼす。

②日本人との異文化接触体験が一般的に異文化に対する意識や関心の形成にも影響を及ぼす。

という仮定を質問紙調査によって実証する。

方　法

1. 手続

首都圏にある複数の在日朝鮮人学校で生徒個人に質問紙を配布し，一斉調査を行った。調査時期は1991年2月～3月，調査対象者は中級部（中学）1・2年生（12～14歳）であり，質問紙の使用言語は日本語である。各項目の記入の仕方について朝鮮語で説明を行った。

2. 質問紙の構成

(1)日本人との接触体験

現在と過去の両方を含む。日常的に日本人と接する機会の有無と，過去にポジティブな接触があったか，ネガティブな接触があったかを知るための質問。

(2)日本や日本人に対する個人的関心

日本や日本人との関わり方に対する調査対象者自身の意識や関心についての質問。

(3)日本人観

一般的な日本人のイメージに関する質問項目。回答形式は5段階評定。個々の項目は，岩男・萩原（1988）の研究で留学生から見た日本人の特徴として挙げられていたものを参考にして作成した。

(4)異文化接触に対する関心

日本や日本人だけではなく，異文化一般に対する調査対象者自身の意識や関心についての質問。

結　果

1. 調査対象者の属性

調査対象者数は，合計167名（男子77名, 女子90名）であった。調査対象者の属性は，TABLE 1に示す通りである。以下，パーセント表示をする場合，無回答の者は除いて計算した。

両親の国籍は，父母とも朝鮮（北朝鮮）籍が約60%を占めており，残りのほとんどは韓国籍である。日本籍の親を持つ者も若干いるが両親とも日本籍であるケースは皆無であり，調査対象者全員が在日朝鮮人の子弟であることが確かめられた。一方，家庭内で用いられている言語については，日本語が多い。「朝鮮語だけ」という者は皆無であり，「日本語だけ」という者が過半数を占めている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 1 調査対象者

国 籍	朝鮮籍	韓国籍	日本籍
父の国籍	65.2%	31.6%	3.2%
母の国籍	58.3%	37.4%	4.3%
使用言語	朝鮮語	日本語	両 方
父との会話	0.0%	53.9%	46.1%
母との会話	0.0%	55.2%	44.8%
通学経験	幼稚班から	初級部から	中級部から
朝鮮人学校への入学時期	33.5%	64.1%	2.4%

在日朝鮮人学校への入学時期は，ほとんどが「幼稚班（幼稚園）」，「初級部（小学校）」からであり，「中級部（中学校）」からという者はごく僅かである。途中からの編入生もごく僅かであり，ほとんどの者が朝鮮人学校に6年以上の通学経験を持つ。

2. 日本人との接触体験

主な結果はTABLE 2に示す通りである。

TABLE 2 日本人との接触体験

	あり	なし
(1)日本人の親友	72.5%	27.5%
(2)家族ぐるみの付き合い	41.9%	58.1%
(3)日本人の子と接する機会	47.9%	52.1%
(4)嫌な思い	30.5%	69.5%
(5)良い思い	25.6%	74.4%

	1度もない	1，2回ある	たまにある	たびたびある	ほとんど毎日
(6)じろじろ見られる	31.7%	17.4%	33.5%	11.4%	6.0%
男子	57.1%	22.1%	18.2%	2.6%	0.0%
女子	10.0%	13.3%	46.7%	18.9%	11.1%

	感じない	どちらかというと感じない	どちらともいえない	どちらかというと感じる	感じる
(7)文化的困難	44.9%	17.4%	23.4%	9.6%	4.8%

「日本人の親友」については3/4近くの者が日本人の親友がいると答えている。また，「家族ぐるみで付き合う日本人家庭」に関しても40%程度の者がそのような相手があると回答しており，日常的に日本人と親しく接触する機会はかなり確保されていることが分かる。

「同年齢の日本人と接する機会」については，半数近くの者が学校外でそのような機会があると答えている。塾，スポーツクラブ，習い事，地域活動など，いわゆる一般的な課外活動がその具体例として挙げられている。

「日本人でないために嫌な思いをした経験」は約30%の者が「ある」と答えている。「嫌な思い」の内容は，差別的態度（25例），言語的攻撃（25例），身体的攻撃（5例），制度的差別（2例）に分類できる。差別的態度では，「仲間外れ」（6例）等があり，中には朝鮮人と知られたとたん文通をやめられたというケースも見られた。言語的攻撃では「日本から出て行け」（8例），「死ね」（3例）等といった言葉を投げつけられた経験があり，差別の対象として「名前をバカにされた」（4例）ケースが多かった。

一方，約25%の者が「日本人ではないために良い思いをした経験」が「ある」と答えている。「良い思い」の内容は，「ことば」（17例）と「服装」（6例）に関するものがほとんどである。言葉の問題では，2か国語，あるいは3か国語（朝鮮語・日本語・英語）を使えることに関することが多く（12例），服装では女子生徒の制服であるチマ・チョゴリ（民族衣装）をほめられたというものがあった。「日本人にじろじろ見られて嫌な思いをする経験」には性差があり（$\chi^2(4)=15.6, p<.01$），女子の方が多かった。チマ・チョゴリを身につける機会が多いためかも知れない。性別によって異文化接触状況に違いがあることが示唆された。なお，日本人との接触での「文化的困難」は感じていない者が多かった。

3. 日本や日本人に対する個人的関心

主な結果はTABLE 3に示す通りである。

TABLE 3 日本や日本人に対する個人的関心

	そう思わない	どちらかといえばそう思わない	どちらともいえない	どちらかといえばそう思う	そう思う
(1)深く付き合いたい	12.0%	9.6%	31.1%	22.8%	24.6%
(2)友人が欲しい	15.6%	12.6%	24.6%	19.2%	28.1%
(3)伝統文化に関心*	25.1%	28.1%	21.1%	21.6%	4.2%

*：「全くない」～「大変ある」

「日本人ともっと深く付き合いたい」，「日本人の友人がたくさん欲しい」に対しては，「そう思う」，「どちらかといえばそう思う」を合わせると半数近くを占め，人に対する関心は比較的高い。一方，「日本の伝統文化への関心」については「大変ある」と答えた者が少なく，文化への関心は相対的に低い。

4. 日本人観

項目群の特徴を分かりやすく示すため，因子分析を用いて項目を分類した。まず，「そう思わない」に「1」～「そう思う」に「5」という形で得点を与えた。次に，相関行列を固有値分解して得られたスクリー図から2因子を抽出することとし，主因子法で因子抽出を

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

行い，バリマックス回転をした。その結果，TABLE 4に示すような因子パターンが得られた。

6項目から成る第1因子を「国民性尺度」，5項目から成る第2因子を「対外国態度尺度」と命名した。これらの尺度の得点分布は，FIGURE 1に示すように，前者がほぼ左右対称なのに対して後者は高得点の方に片寄っている。ここから，日本人の「対外国態度」に対して厳しい見方がされていることが分かる。

TABLE 4　日本人観の因子分析

	第1因子負荷	第2因子負荷
(1)日本人は信頼できる	.866	−.256
(2)日本人は正直だ	.594	−.120
(3)日本人は親切だ	.532	−.154
(4)日本人は付き合いやすい	.480	−.110
(5)日本人はプライバシーを大切にしない	−.422	.183
(6)日本人とは本当には親しくなれない	−.554	−.029
(7)日本人は外国人の評価を気にしすぎる	.038	.595
(8)日本人は欧米人とその他の外国人で態度が違う	−.137	.579
(9)日本人は日本人と外国人で態度が違う	−.196	.554
(10)日本人は言うことと思うことが違う	−.333	.551
(11)日本人は私の国をよく理解していない	−.079	.348
因子寄与	2.27	1.57
尺度名	国民性	対外国態度

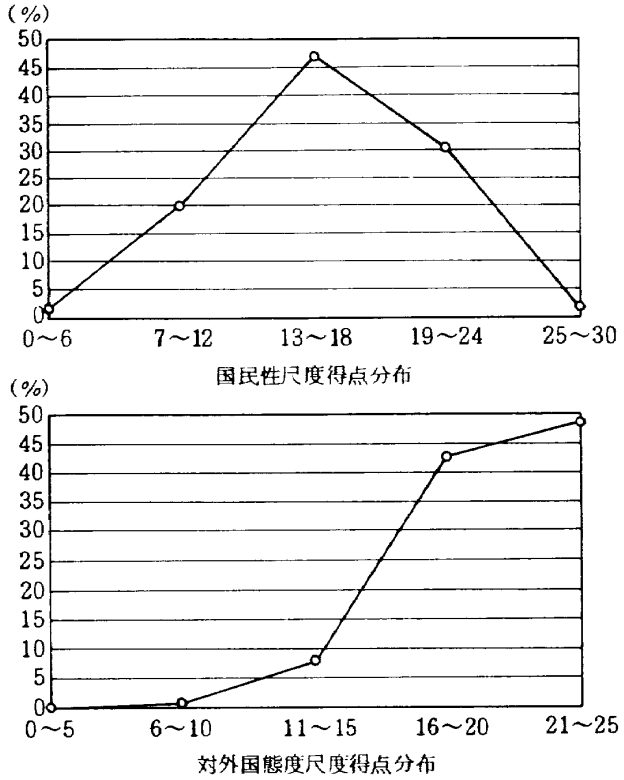

FIGURE 1　国民性尺度と対外国態度尺度の得点分布

5.異文化接触に対する関心

主な結果はTABLE 5に示す通りである。

TABLE 5　異文化接触に対する関心

	否定的	どちらかといえば否定的	どちらともいえない	どちらかといえば肯定的	肯定的
(1)歴史や文化への興味	16.8%	10.2%	10.2%	26.3%	36.5%
(2)人と知り合いたい	6.0%	10.2%	15.6%	24.6%	43.7%
(3)他民族との結婚	51.5%	10.8%	18.0%	8.4%	11.4%

日本に対してと異なり，異文化接触一般に関しては「歴史・文化」と「人」の両方に対して関心が向いているのが特徴である。しかし，将来「結婚」という形で異なるエスニシティを受け入れてもよいかどうかについては，半数以上が否定的であった。

6.「日本人との接触体験」の異文化に対する意識への影響

「日本人との接触体験」に関する項目を説明変数とし，「日本や日本人に対する個人的関心」，「日本人観」，「異文化接触に対する関心」の諸変数をそれぞれ従属変数として数量化I類による分析を行った。なお，性別によっても異文化接触状況が異なることが示唆されたため，性別も説明変数として加えることとした。また，5段階評定の項目は，調査対象者の数ができるだけ等分されるように2値に分類した。高い説明力が得られたもの(重相関係数が.4以上で，解釈に無理がないもの)について報告する。

それぞれの従属変数に対する重相関係数と最適スコア，レンジ，偏相関係数はTABLE 6に示す通りである。なお，影響力の小さい変数(レンジ，偏相関係数の小さい変数，原則的には偏相関係数が.2未満)については省いてある。

TALE 6−1　日本人ともっと深く付き合いたい
(数量化I類)　重相関係数 r＝.49

説明変数	最適スコア	レンジ	偏相関係数
日本人の親友	有 0.23 無 −0.67	0.90	.32
良い思い	有 0.63 無 −0.22	0.85	.30

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 6—2 日本人の友人がたくさん欲しい
(数量化Ⅰ類) 重相関係数 r = .50

説明変数	最適スコア	レンジ	偏相関係数
性別	男 −0.37 女 0.31	0.68	.22
日本人の親友	有 0.27 無 −0.78	1.05	.33
良い思い	有 0.45 無 −0.16	0.61	.20

TABLE 6—3 日本の伝統文化への関心あり
(数量化Ⅰ類) 重相関係数 r = .40

説明変数	最適スコア	レンジ	偏相関係数
日本人の親友	有 0.15 無 −0.40	0.55	.20
良い思い	有 0.47 無 −0.16	0.63	.22

TABLE 6—4 国民性尺度 (数量化Ⅰ類)
(重相関係数 r = .44)

説明変数	最適スコア	レンジ	偏相関係数
性別	男 −1.23 女 0.95	2.18	.21
日本人の親友	有 0.46 無 −1.19	1.65	.17
接する機会	有 0.88 無 −0.83	1.71	.20
家族ぐるみ	有 0.67 無 −0.49	1.16	.14
良い思い	有 0.97 無 −0.31	1.28	.13

TABLE 6—5 いろいろな国の人と知り合いになりたい
(数量化Ⅰ類) 重相関係数 r = .44

説明変数	最適スコア	レンジ	偏相関係数
性別	男 −0.32 女 0.28	0.60	.21
日本人の親友	有 0.19 無 −0.53	0.72	.26

(1)日本や日本人に対する個人的関心

日本人の交流に対する関心の高さを表わす2つの変数のうち,「深く付き合いたい」には「親友」と「良い思い」が,「友人がたくさん欲しい」には「性別」,「親友」,「良い思い」が効いていた。また,「伝統文化への関心」には「親友」と「良い思い」が効いていた。

これらのことから,「日本人との接触体験」と「日本や日本人に対する個人的関心」に関連があることの証左が得られた。また,特に「親友」を持つこと,接触体験の中で「良い思い」をすることが重要な要因であることがわかった。

(2)日本人観

「対外国態度尺度」については,説明力が低かった(重相関係数 r = .29)。しかし,「国民性尺度」についてはいくつかの変数が総合的に効いていた。なお,値が大きいほど,日本人の「国民性」をポジティブに評価していることを示す。

(3)異文化接触に対する関心

人との交流に対する関心を示す項目,「いろいろな国の人と知り合いになりたい」には「性別」,「親友」が効いていた。「歴史・文化」への関心,「結婚」に対する意識との関連は不明確であった。

全体を通して見たときに,日本というホスト・カルチャーに対する関心,文化背景の異なる「人」に対する関心の形成に,日本人との異文化接触体験が関係があることがわかった。また,異文化接触体験の諸変数のうち,特に「親友」の有無と「良い思い」の有無が重要な変数であり,性差も見られるということがわかった。

考　察

調査結果について考察する前提として,同じ出自を持つ文化的マイノリティ集団であっても,ホスト・カルチャーの違いにより,マジョリティ文化と自らを区別する民族文化的要素が異なっていることに触れておくこととする。例えば,在日朝鮮人集団は外見上からは見分けられないヒドゥン・マイノリティであるのに対して,米国の朝鮮系移民は,外見から見分けられるオープン・マイノリティに分類される (Ichikawa, 1990)。本研究の調査対象者は日本語を母語としており,日本人との接触における「文化的困難」もあまり意識されていない。したがって,マジョリティ文化と彼らを区別する民族文化的要素が何であるかが改めて問題になる。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ひとつの大きな要素は国籍である。在日朝鮮人の多くは朝鮮籍，韓国籍を保持している。アメリカ合衆国の2世がアメリカの市民権を得ているのと対照的である。本研究の調査対象者は少なくとも片親の国籍が日本ではなく，重要な民族文化的要素である朝鮮言語・姓名・民族衣装を日常的に使用している。また，「族譜（チョクボ；家系図）」を大切にするといった形で親族関係を非常に重んじる朝鮮民族の文化的属性が，「他民族との結婚」を望まない者が多数を占めるという結果になって現れたと考えられる。心理的にも朝鮮民族の民族文化的要素を保持している様子がうかがえた。

調査対象者の多くにとって，自らのエスニシティは日本人との接触において重要な要因となっている。例えば，日本人との接触の中で「良い思い」や「嫌な思い」と受けとめられている事柄の具体的内容を見ると，自文化の民族文化的要素に関係するものが大多数となっていることからそれがわかる。したがって，エスニック・マイノリティである彼らにとっては，日常的な日本人との接触状況が十分に異文化接触体験となっていると言える。

それでは，そのような異文化接触体験が，彼らの日本あるいは一般的に異文化との接触に対する関心と，どのように関係しているのであろうか。「日本人との接触体験」の中で，特に彼らの「日本や日本人に対する個人的関心」との関連が顕著にみられたのは，「日本人の親友」の有無と日本人との接触における「良い思い」である。すなわち，日本人との接触の機会が親しい交流につながるものである場合に，日本人との接触への関心が高められることを示している。具体的に「良い思い」の内容を吟味すると，複数言語（朝鮮語・日本語・英語）を使えること，女子の制服であるチマ・チョゴリに対して日本人から肯定的評価を受けたことが挙げられている。このことは，調査対象者の民族文化的要素が異文化接触体験の質を定める重要な役割を果たしていることを示唆していると言えよう。言い換えれば，日常的な接触の中で彼らのエスニシティを肯定的に介在させることによって，彼らのエスニック・アイデンティティを支援することになり，またそのことによって，彼らのホスト・カルチャーとの接触への関心が高まるというダイナミズムがそこに浮かび上がってくる。女子が服装という形で民族文化的要素を顕在的に示す機会が多いことを考えると，「日本や日本人に対する関心」に性差があり，女子の方が関心が高いことも納得できる。

日本文化や日本人との接触体験が，その直接的対象への意識や関心を越え，一般的に「異文化接触への関心」に影響を及ぼす，という我々の仮定については，一部の分析で関係が見出された。ここでも「日本人の親友」があることが，異なる文化の人々との交流に対する関心の高さと関係している。ある特定の異文化の人との良好で持続的接触が，一般的に異文化の人との接触に対する関心に影響を及ぼすことを示唆していると言えよう。

調査対象者の多くは日本人と親しく，また広く交流しており，交流に対する関心も比較的高い。しかし，その一方で，彼らの文化に対する日本人の理解についてはあまり高く評価されていない。「日本人との接触体験」は，異文化交流に対する積極的な関心を促すような心地よいものばかりではない。日本人とのつき合いで「嫌な思い」をした経験のある者は30％にのぼる。その具体的内容には朝鮮民族，あるいは外国人であることに対する差別が挙げられており，例えば，「名前」というまさしく彼らのエスニック・シンボルが差別の対象になる現実がある。彼らのエスニック・アイデンティティを肯定的に受容する社会文化的環境が整っているとは言えない。確かに調査対象者の個人的関心としては，日本人との接触に対して肯定的な回答が多かった。また，日本人の「国民性」に対しても，中立的である。しかしながら，日本人の「対外国態度」（彼らの国に対する理解を含む）に関しては，否定的回答が目立っている。つまり，日本人が異文化集団と接触する場合に問題が生じるのである。彼らの認識を通して，日本人の異文化接触に対する不器用さ，文化的閉鎖性が図らずも浮き彫りにされたと言えるのではないだろうか。

本研究の結果は，近年の文化多様性（Cultural Diversity）やマイノリティに関する研究が指摘するように，複数の民族，あるいは文化が同居する社会においては，文化的相違を無くすこと（同化）に努力をしたり，他の文化に無関心であったり無干渉であったりするのではなく，異なる文化を受容し，更にその文化を積極的，かつ肯定的に評価することが重要であることを支持している。例えば，Berry（1989）は文化接触の個人要因として「文化変容態度（ある文化に属する個人，あるいはグループが他の文化と関わろうとする態度）」を「文化的アイデンティティの保持」と「自文化以外のグループとの関係に対する姿勢」という2つの角度から，「統合」，「同化」，「分離」，「辺境」に分類している。その中で「統合」が最も心理的負荷が穏やかであるとしている。それは文化的アイデンティティを保持しつつ自文化以外

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

のグループとの関係も保持する態度である。また，社会要因としては，社会において受容され肯定的に捉えられていること，更に社会参加のあらゆる機会に関して平等であること等を肯定要因として挙げている。日本の中のマイノリティ・グループとして朝鮮人学校に通う調査対象者がエスニック・アイデンティティを保持しつつ，日本社会で生き生き生活するためには，日本人が彼らのエスニシティを積極的に評価し，むしろ活用していくことが望まれる。また，そのことが，不可避的に文化接触の起こる国際社会において，日本人が自らのアイデンティティを大切に保持しつつ，上手に異なる文化を持つ人々と付き合っていくための方向性を示しているとも言えるかもしれない。

最後に，既存研究の少ない領域での調査であったため，本研究の質問紙は問題発見的質問構成をとったが，次の段階においては，異文化接触体験の中でも「親しい」交際やお互いに「良い思い」をする関係の成立する契機は何か，といった点に焦点を絞った研究が必要である。本研究の調査対象者の異文化接触に対する関心の大きさが，エスニック・マジョリティである日本人の中学生と比較してどうなのかという問題も，研究を行っていく必要があるものと考えられる。

引用文献

綾部恒雄編 1982 アメリカ民族文化の研究 エスニシティとアイデンティティ 弘文堂

綾部恒雄・小野沢正喜 1970 在日留学生の文化接触に関する文化人類学的研究 九州大学比較教育文化研究施設紀要, 30号, 33—84.

Berry, J.W. 1989 Psychology of Accultuation, In J.J.Berman (Ed.), Cross-Cultural Perspectives, Pp. 201—234, Nebraska : University of Nebraska Press.

江淵一公 1982 日系アメリカ人の民族的アイデンティティに関する一考察 —カリフォルニア州サンノゼ日本町における三世の行動分析を中心として— 綾部恒雄編 アメリカ民族文化の研究 弘文堂 137—199.

De Vos, G. & Romanucci-Ross, L. 1975 Ethnic Identity : Cultural Continuities and Change. Palo Alto, CA : Mayfield.

福岡安則 1993 在日韓国・朝鮮人 若い世代のアイデンティティ 中公新書

原尻英樹 1989 在日朝鮮人の生活世界 弘文堂

Ichikawa, V. 1990 A case study of Chinese students in The U.S., International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions 12th International Congress Abstracts, 128.

岩男寿美子・萩原 滋 1988 日本で学ぶ留学生 社会心理学的分析 剄草書房

小林哲也 1981 海外子女教育・帰国子女教育 有斐閣

李 瑜煥 1984 日本における韓国朝鮮人の歴史と現況 環太平洋問題研究所編 韓国北朝鮮総覧 原書房

箕浦康子 1984 子どもの異文化体験 人格形成過程の心理人類学的研究 思索社

Nitta, F. 1988 Kokusai Kekkon : Trends in intercultural marriage in Japan, *International Journal of Intercultural Relations*, **12**, 205—232.

Rotheram, M.J. & Phinney, J.S. 1987 Introduction : Definition and perspectives in the study of children's ethnic socialization. In Phinney, J.S. & Rotheram, M.J. (Eds.), *Children's Ethnic Socialization* (pp.10—28). Newbury Park : Sage.

Stephan, C.W. 1992 Mixed-Heritage Individuals : Ethnic Identity and Trait Characteristics. In M. P. P. Root (Ed.), Racially mixed people in America. Pp.50—63. Newbury Park, CA : Sage.

山崎瑞紀 1993 アジア系留学生の対日態度の形成要因に関する研究 心理学研究, **64**, 3, 215—223.

謝 辞

本研究の遂行に当たり，色々な方々の助けを得ました。まず，調査を許可して下さった，在日朝鮮人学校の先生方に感謝いたします。また，質問に答えてくれた生徒のみなさん，朝鮮語で調査の説明をして下さった金敬世さんに感謝いたします。また，調査票の整理などに協力して下さった，大学入試センター非常勤職員の神田由紀子さん，高瀬道さんに感謝します。最後に，研究会に参加し，有益なアドバイスを下さった上智大学の宗中正さん，畔柳園子さんに感謝いたします。

(1994.2.3受稿，5.17受理)

NII-Electronic Library Service